

学校目標・経営方針	自立と社会参加を目指すために個に応じた指導の充実を図り、家庭や地域と連携して主体性をもって生きる心豊かな人間を育てる。
-----------	---

山梨県立やまびこ支援学校校長 小嶋加津美

本年度の重点目標	基礎的・基本的な知識及び技能の習得と情報活用能力の育成	達成度	A	ほぼ達成できた。(8割以上)	評価	4	良くできている。
	自ら考え、判断、表現する力の育成		B	概ね達成できた。(6割以上)		3	できている。
	学びに向かう力、社会と関わりながらよりよく生きるための人間性の育成		C	不十分である。(4割以上)		2	あまりできていない。
	豊かな心と健やかな体の育成		D	達成できなかった。(4割以下)		1	できていない。

自 己 評 価				学校関係者評価		
本年度の重点目標				年度末評価(1月17日現在)		
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	家庭と連携しながら、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を目指すと共に、望ましい情報活用能力を習得するための情報機器の使用法を身につける。	情報発信と保護者来校機会を確保し、情報共有を進め家庭と連携した学習指導を展開する。 小中高の一貫性を意識し、各学部における学習期間を見通した「個別の指導計画」を作成し、職員間で共有しながら授業内容の定着を図る。 授業や日常全般を通して情報機器に触れる機会を増やし、主体的な情報収集能力や活用能力および情報モラルを育成する。	学校評価アンケート 学部取り組み評価 学校評価アンケート 学部取り組み評価 個別の指導計画 学校評価アンケート 学部取り組み評価 個別の指導計画 教員自己観察書	・家庭との連携について概ね達成できていると考えているが、保護者が日常の教育内容に触れる機会が限られており、教育計画の保護者理解が進んでいるという実感が持ちにくい。 ・教育目標や学部の重点目標に一貫性を持たせ、日常の教育活動の中で教師が意識できるようになりつつある。 ・一日の日課の中でICT機器を日常的に使いながら授業や学級活動を行うようになってきていて、児童生徒が情報モラルを意識する機会が増えつつある。	B	・毎日の連絡帳や学期ごとの参観や懇談を通して、保護者との情報共有を行い教育内容の理解を求めている。タブレットの持ち帰りも一部で進めているが課題もありICT機器の活用が校内中心になりがちである。保護者がICT活用の実感を持つための方策が必要である。 ・授業計画の立案が、各学部で積み重ねてきた学習内容を踏まえたものであるよう、単元配列表等の活用をさらに進める必要がある。
2	学校生活の中で自ら考え、判断、表現する場面を大切にし、思考する態度を育てる。	児童生徒の主体的な学びのために、PDCAサイクルに基づく授業改善を日常的に実施し、指導と評価の一体化を促進する。 児童生徒に学校行事への取り組みを促し、自らその場に合った行動ができる態度を身に付けさせる。 言語環境を整備し思考力判断力表現力の基盤をつくる活動を充実させ、主体的な学習活動につなげる。	学校評価アンケート 学部取り組み評価 個別の指導計画 学部取り組み評価 個別の指導計画 学部取り組み評価 個別の指導計画	・校内研究の主題を「学びの質を高めるための指導と評価の充実を目指して」とし3年間授業改善に取り組んだ。また、個別の指導計画を活用しながら、単元計画と評価の観点、学習計画実施後の展望等を授業者が整理して、教育内容をよりきめ細やかにすることに取り組んでいる。 ・教育重点に言語環境の整備を掲げ、児童生徒の思考力、判断力、表現力を学校生活の様々な場面で育成しようという教師の意識向上につなげている。	B	・教育内容の向上や充実を図るための手法や実践を研究し、また実際の指導計画の書式を整えたが、児童生徒の実態把握や教育計画の策定には、授業者の情報共有や多くの時間が必要であり、教師の働き方改革の促進が課題となっている。 ・児童生徒に指導する教師の側の、言語環境に対するさらなる意識の向上が求められる。
3	体験的な学習をはじめ児童生徒会行事や交流および共同学習を通じて自主性や社会性を育み、学びに向かう力や社会と関わりながらよりよく生きるための人間性を身につける。	体験的学習や児童生徒会活動に組みませ、主体性を持って活動する体験を積み、学びに向かう力を育む。 校外学習や体験的学習、交流および共同学習を通じ学校外の人々とふれあい、社会性を育む。 諸活動を通じて望ましい道徳観や場に応じたモラルを身につけ、またそれを情報モラルにもつなげる。	学校評価アンケート 学部取り組み評価 個別の指導計画 学校評価アンケート 学部取り組み評価 個別の指導計画 学部取り組み評価 個別の指導計画	・児童生徒会集会をはじめ縦割り型での行事を何度か企画し、児童生徒が主体性をもって活動する様子がみられた。 ・学校間交流や地域交流が直接交流で実施できるようになり、対面で互いを意識しながら活動し、社会性をはぐくむよい機会とすることができた。 ・児童生徒は体験的な活動を行うことで、活動で協働する相手のことを思いやりったり気遣ったりする場面も見られ、精神的な成長につながった。	B	・児童生徒会行事に関しては、児童生徒の成長の様子が見える機会でもあるので、保護者に公開したり参加してもらえるような取り組みを考えたい。 ・直接交流は4年振りになる場合も多く、相手方との企画の打ち合わせ等担当者も手探りな状況となった。内容を深める余地がある。 ・自閉傾向が強い児童生徒の集団であるので、他者との協働の場面に馴染み易い企画が求められる。
4	生命に関わる学習、余暇活動に関わる指導を充実させ、豊かな心と健やかな体の育成を図る。	日常的な学習活動を通じて道徳教育を充実させ、自分以外の物事に対する思いやりや、美しいものに感動する心を育む。 個に応じた余暇活動、遊びや様々な運動、給食指導などを通し、望ましい生活習慣や運動、食生活への関心や態度を育成する。 避難訓練や防災・防犯教育を通し、災害や犯罪への理解を促し、危機回避の方法を身につけさせる。	学校評価アンケート 学部取り組み評価 個別の指導計画 学校評価アンケート 学部取り組み評価 個別の指導計画 学校評価アンケート 学部取り組み評価 個別の指導計画	・道徳教育の全体計画の下教科としてのみならず、あらゆる時間を通して道徳を考える機会を設定した。 ・生活習慣の確立は、外部専門家の助言を参考にし、精神面、身体面、摂食と、個々の課題解決を目指して取り組んだ。 ・防災計画やマニュアルを実効性の観点で改訂した。また避難時の防災頭巾着用もヘルメット着用に切り替え、避難のイメージ作りを行い、訓練時のヘルメット着用が定着した。	B	・道徳の指導についてはテーマを決めて、様々な授業で同じテーマについての学習を取り扱うなど繰り返し学習することが効果的であると考えられる。指導体系を工夫しながら取り組みたい。 ・教師の学びを推奨し、専門性や関連指導領域の理解深化を進めたい。 ・能登半島の震災を踏まえ、地域と連携しながら、災害時の孤立に対応する準備が必須である。

学校関係者評価	
実施日（令和6年1月29日）	
評価	意見・要望等
3	・今年度は保護者が学校に来る機会も増えたことは良かった。保護者の学校評価でPTA活動と進路に関して「わからない」という回答が多かったので、お便りやHPでの情報発信に更に取り組み保護者への周知を図ってほしい。 ・改定した個別の指導計画を実施した結果を検証する必要がある。 ・ICT機器の活用はあくまでも児童生徒の学びを支援することが目的で、ICT機器の活用が目的ではないことを押さえて指導にあたるとともに、家庭との連携を図ってほしい。 ・小中高等部が同じ敷地内にある強みを生かして、相互授業参観など各学部の学習内容等を相互に理解して連携を深めてほしい。 ・家庭と学校との間の障害理解の隔たりを解消すべく、児童生徒本人に歩み寄り、家庭と連携して理解を進め、本人の可能性を伸ばしていったほしい。
3	・児生会活動や修学旅行、校外学習が実施され、集団での活動や直接的な体験ができたことには大きな意味がある。地域に開かれた学習活動が積極的に計画・実施されており、とても評価できる。 ・児童生徒の指導を充実させるためには、教員間の情報共有が欠かせない。授業づくりや教材作成に重きが置かれるように努めていただきたい。 ・特別支援学校における指導と評価の一体化は、地域の学校以上に重要なテーマだと思います。個々の児童生徒の学習状況をしっかりと見取り、その後の指導に反映させることの繰り返しが生きて働く学力の形成につながっていくのではないのでしょうか。 ・児童生徒の実態把握には多くの時間と労力を要するが、本人、家族、学校の思いや考えを近づける努力をしてほしい。 ・一つ一つの課題に向き合い児童生徒や保護者の思いを学習活動に生かしてほしい。
3	・児生会活動は児童生徒が大集団の中で活動することを通して、社会性を身につけることができ、児生会役員が主体性を発揮できる大事な場である。さらに活動が充実することを期待している。 ・高等部卒業後の進路については大月、上野原地域の事情もあり、大変厳しい印象を受けた。小学部の段階から、この地域の実情を知ってもらい、卒業までに何が必要なのか、課題は何かということを考えてもらうような取組を進める必要がある。保護者の参加も実現して、保護者が子供の障害特性を理解する機会にしてほしい。 ・学校間交流は、双方に意義のある活動だと思います。直接交流が復活しているとのことだが、単純にコロナ以前に戻すだけではなく、新たな交流のスタイルを構築していくことも大切ではないか。 ・縦割り型の行事は児童生徒にとって良い効果がある。
3	・道徳の指導は教科の指導では得られない内容も多いと考える。標語などのテーマを決めての取り組みもわかりやすく効果的ではないか。 ・教科別の指導に力を入れている一方で、教科前の学習(初期学習・概念形成)や肢体不自由に関する学習については、もっと学ぶことが必要ではないかと思った。校内研修システムの充実や校外研修の推奨など、更に取り組んでほしい。 ・災害がいつ起きても対処できるように、地域と連携した避難訓練に取り組んでほしい。 ・災害発生時における障害のあるお子さんの避難や避難所での生活について、地域社会との理解を図っておくことも大切ではないか。 ・災害備蓄について見直しや改善を進めてほしい。

留意点 (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。
(2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。